

哲学文化観

総論

1)思想と過程と世界観

個々の現象における正負の体験と反省と改善の習慣を生む。直接的な現象の良し悪しと間接的な因果へ思慮が及び良きは維持と増進・悪しきは改善の力を生む。個別現象と特定領域観と全体性の領域等という産出性の範囲が浮かび上がる。平等の理性という根源的な理念を変わらずにして万人的な立場から見る最大公約数として、「生態の健全と永続」という理念集約に至る。過程面に生態の根幹性が掴み出される。真理の探究という感性と思考と作為の習慣から普遍的不変性の問いと探求が続き根本且つ全体性の世界観が産み出される。

習慣性	世界観：	産出性：生態の健全と永続性
	過程性：	根幹性：感性と観念と精神と身体の相関と習慣
	思想性：	根源性：平等の理性

2)少子高齢化

今日、少子高齢化という社会構造の問題認識が現れる。人口構成と年齢構成の不均衡による平等の理性の崩れた事態と解される。生態の健全な姿とは異質の認識を生む。マクロ政策を担う立場における政策目的について上述のような普遍的不変の世界観を抱き作る態度に適正観が産まれる。生態の健全と永続という理念と世界観を実現する為の政策を作り遂げる事がマクロ政策を担う立場の創造と想定される。少子高齢化という状態からいくつもの問題現象が産まれる。これへの対応策を投じると同時に生態の不健全性を招いた原因と分析を重ね生態の健全な状態を理想と起こし実現する思索と施策をもって全体最良へ及ぼせることが大局を作る立場の役割と定まる。

3)人間と生態の健全と永続

人間と生態の根本的な適正と全体の姿の健康を求め長らく存続する生態を実現する事に根本の適正と全体の適正を求め作る創造法則と定立される。マクロ政策の目的や理念の起こし方に適性を欠くと少子高齢化という生態バランスの崩れについて問題視が弱まる。そもそもの目的や理念の取り方に問題があったという反省と改善に及んで適正な理念と世界観を引き出し作る力が産み出される。個々の現象と反省と改善の熱意が存続し抽象原理や抽象性の領域観や世界観を描き、健康な感性から思想を生み世界観が描き出されて理念や世界観の適正を問うということに至る。この取り方が可笑しいとそもそもの根本性に問題があり問題の上に二次三次の常識が作られる。

4)根本原理と応用

人間の感性と観念と精神と身体の相関と習慣という根本的な観点を土台性に起こし社会空間の中大局的な範囲を想定し根本性を反映した全体性の広がりをもって変らぬ健全な性格を不動にして全体性を抱き作る法則が産まれる。「狭義の哲学文化と教育金融と政治行政と産業経済」という各種特定領域の分化と統合の概念が産みだされる。

5)社会の中大局観

根本的な理念や世界観の抱き方に問題が出現する。哲学文化は根本且つ全体の適正を問い引き出す作用を生む。この面からの適正をもって「教育金融や政治行政や産業経済」という特定領域へ対し全体的な理念や世界観を示し全体像の同一性と共に各領域における理念が形成され全体と特定の適正な相関が作り出される。全体性の理念の同一性と特定領域における主要な働きに整合性が産み出されて、一つのベクトルに向けて各個性と協業の体系が産み出される。

統合性	根本且つ全体性	狭義の哲学文化、 人間と生態の健全と永続		
分化性	特定領域	教育金融	政治行政	産業経済

静的 動的	静的	広義の哲学文化・広義の普遍的不変性 根本且つ全体性
	動的 特定領域 ・狭義の哲学文化 ・教育金融 ・政治行政 ・産業経済	動静 根本且つ全体性の共通性 特定領域の主要な作用 分化と協業の適正

6)根本理念と適正稼働

自己責任を過度に求めるマクロ政策者などという性格が出現することについて、そもそもの問題点と原因を整理し健全な人間平等の理性を働かせて適正概念を起こし権利義務の不均衡性が広がる事の無き適正基準と稼働を図る態度が産み出される。根源性が歪化すると、権利義務の不均衡性を広げられる。

7)広義の哲学文化性

哲学文化観等として、万人同一性の理念を模索し世界観を引き出し、学術体系などとして精査した創造体系と稼働に連ねる作用が産み出される。抽象と準抽象と具象の観点と整合の創造体系と動態性を併せ持ち、健全な主体性と領域性を遂げる基準と稼働の実際性を生む。広義の哲学文化観と実感の体系を産む。

各論

1) 広狭の哲学文化

1-1 人権と主権

人権を重んじる態度を示すとあいつは国家の奉仕や保守の精神が弱い等という指摘が現れる。歪な保守観に偏った観念を抱き個別現象に適用する態度にないか。そもそもの人間性や主体性の適正観を問いどのような形に健全性が備わるか、確たる基盤性の見解を整える発想や探求が萎むと歪な抽象概念と粗雑な適用と歪な欲求を遂げる性格が産み出される。

1-2 根本基準

人間像や領域観について、根源的な側面から具象と抽象の繋がる概念の集約を表し、変わりづらい普遍的不変を提起する働きが要る。この狭義の普遍的な不変という理念や概念に対し実際の現況を踏まえ最良的な方法を投じる理念と現況と方法の回る習慣や活動法則を含む人間像や主体性像をもって健全な感性の実際性と良し悪しを問う広義の普遍的な不変を遂げる。

1-3 感性と観念と精神と身体

あまりに頭概念に偏し直接的な身体性や感性の一次的な現象を省き概念と適用の一律的な解釈を強める不健全性が起こる。習慣の歪化の問題視が起こる。人間性や主体性について専門的な関心を投じ根源的な面から適正像を示す作用が健全に出現し歪な概念と適用の粗雑性の予防に連なる。納得感や共感の深まる確かな概念導出作用が起こり歪な基準と適用に外れぬ適正を遂げる。

1-4 教育学術作用

学術分野の働きが弱いと良い概念の提起と訴求が萎み実社会への有用な創造と領域性の認識が弱まる。程度の悪い性質が妙な力を持つと健全な力と好循環性を停滞させる。

1-5 哲学文化と科学技術

あまりに科学技術が先行し人間の基礎が希薄化し力と活用の歪性が深まり広がると長期的利益を喪失した社会と生態を招く。コミュニケーションの健全な在り方の確かな適正観の同一性が増し長らく良好な文化基盤が存続し自存と他存の適正とプラス性の創造と社会と生態を作る有用な働きを担う分野が求められる。

1-6 広狭の哲学文化

当該生産性は「人間と生態のあるべき姿を問い提起する」主要な関心を内包に有し外界への産出と納得感の向上や問題点の指摘を謙虚に受けながらより良い形を探究し作る習慣が産まれる。物質文明による短期的な感覚と効用が高まり、言葉の羅列や言葉と体の分断が広がる傾向が出現し人間性が歪化し負の側面が顕在化する。物理依存と自存願望の高まりと他存性の喪失という根源的な不良が進む事に対し長期的な適正を求め言葉や概念に導出し同一的な基礎と価値観の共有を増し土台性の適正と個別具体の適正に連ねる創造原理を実現する。

2)主体性学

2-1 感性・思考と行為の健全性：活動法則性

朝、起きて顔を洗い服を着て食事を作り食べ、家を出て学校や職場に向かう。午前中は資料の整理をやり午後に人に会う。就業時間が来て家に帰り風呂に入り就寝する。このような日々の現象に具体的な皮膚感覚の実感が出現する。日々の活動に対し週ごとの観測点を設け活動を振り返り意図と結果の集計と反省を行う中期的な基準と稼働の観点が形成される。具象的因果に対し準抽象の観点と観測と評価と分析と反省と改善という思考と行為の法則が産まれる。更に、月毎、三か月、半年、一年等という範囲とそこでの観測基準を設け、基準と結果と反省と改善の抽象観点と稼働の創造が投じられる。静的側面と動態と動静の回る活動法則という抽象集約的な概念を産む。

		静的	空間
			局所、中局、大局
時 間	短期	動 静 観 点 具 象、準抽象、抽象	
	中期		
	長期		

2-2 短期周期の因果性の強まり

どこか、短期周期の経済性と生活スタイルが進行し局所的な因果に偏った利害感覚が高まり、上述のような活動法則や習慣性が減退し、その場限りの利益追求の態度が増幅する事について、反省と改善の観点を起こし、健全な根源性と根幹性と全体性を表し適正を遂げる基礎基盤性の科目が産まれる。

2-3 物理体質の進行と根本観点の導出

物質的な力への異様な依存と外界の従属策を持って競争に勝ち抜き自己の生存を遂げる発想と態度と習慣が強まり、「やったもの勝ち、既成事実化、力による支配、無法者」などという潮流が高まる事に対し、「人間の健全な感性と観念と精神と身体の相関と習慣」や「心理と観念と生物化学性と物理性の相関と習慣」の適正を問い土台的な観点からの変わりづらい良質を求め作る態度が産まれる。

2-4 普遍的不変性

いつの時代やどこの空間にも変わりづらい人間の創造性や活動法則性について、同一基盤性の観念が揃えられ、人間に共通的な尺度を持って一定の安定基盤性の基に自由の適度性を図る観念と精神と身体の相関を持って健全な社会性を作る人間像が産まれる。

2-5 基礎と専門

「人間平等の理性、平等と成長と永続」、「国民主権、人権、平和主義」、「立憲主義、法による統治、三権分立と統合、」等という抽象性の理念に対し根源的な基礎からの適正像を抑え根源且つ根幹性と産出（個別と部分と全体）及び習慣という生態観を起こし、健全な感性と頭と身体との相関と習慣を有する領域性を作る原理と回る。

根幹 (感性と観念と精神と身体の相関と習慣)	産出 (個別・特定・全体)
	根源 (生滅不可分と最良的性の導出)

根幹 立憲主義、法による統治、 三権分立と統合	産出 (個別・特定・全体)
	根源 人間平等の理性、平等と成長と永続 国民主権、人権、平和主義

根本的な概念から見て、各種の抽象的な概念の性格を問い、変らぬ根本性と稼働の適正を作る発想と態度が産み出される。「哲学文化や教育金融や政治行政や産業経済」等という準抽象的な概念も根本性への思慮が希薄化すると、どこか粗雑な概念と活用に外れ、意味不明な言葉と乱用と混乱の世界が広げられる。基礎土台性を喪失した抽象性の弊害認識が増す。基礎の悪い専門性と解される。

根幹 政治行政	産業経済
	教育金融
	狭義の哲学文化

